

一 つ の 教 師 論

—M. レーマー著『カール・ベーム』を手掛りとして—

上 野 武

目 次

I. 序 論

II. 本 論 カール・ベームに学ぶもの

- (1) 「仕えるもの」としての謙虚さ
- (2) 尊敬に基づく権威
- (3) 共に生きる心
- (4) 地震計のような敏感さ
- (5) 若々しさと思慮深さ
- (6) ユーモアと寛大さ
- (7) 素朴さと率直さ
- (8) 信頼と自由
- (9) たゆみなき自己陶冶
- (10) 指揮者以上のもの

III. 結 び

I. 序 論

「教育者としてのレンブラント」とか、「教育者としてのゲーテ」とかいう言葉があるように、教育者とは必ずしも教育理論に精通した人とか、教育の実践家である必要はない。人間の心に深い感動を呼び起すことのできる人、その人に触れる多くの人々をして自己変革へと促さずにはおかない人、被教育者の魂の奥深い層をゆさぶって本来的な自己へと目醒ましてくれる人—そういう人々こそ、言葉の正しい意味における教育者の名に値するのではないだろうか。

もしもそのような観点からみるならば、カール・ベームもまたすぐれた教育者の一人といえる。いうまでもなく、かれは指揮者である。なにかずく、モーツァルトの作品に関しては第一級の指揮者である。そのようなかれの中に、わたしは同時に、一人のすぐれた教育者を見出すのである。

「カール・ベームは名手ではない。むしろ指揮台に立つ偉大な召使である。……むろんかれ

は、世界的な指揮者たちの最前列に立っている。この高みへの上昇は、一步一步足をふみしめながら完成したものである。指揮者ベームの神経質に震える手を、いつも法律家ベームの熟慮が導いていたのである。かれはオーストリアの南部グラーツ市の出身であって、シュタイアーマルク州の人だ、山男だ、と言われるのを非常な誇りにおもっている。かれのレパートリーには、ボビイ伯爵（伝説的なオーストリアのユーモリスト）が見せてくれるようなウィットがあふれている。かれの魅力は人の心にしみとおる魅力である。かれのユーモアは正真正銘のシュタイアー人のものである。かれの心はきわめて感じやすいが、しかしまた寛大でうちとけやすい。

何時間もいっしょにいと、相手の質問や考えさえも、ひとつひとつまるで地震計のように記録する、なみはずれてやさしい思いやりのある人であることがわかってくる。カール・ベームとはそのような人なのである⁽¹⁾。」

これは、マルガレーテ・レーマーという女性の著者が、心からなる尊敬と憧憬の想いをこめて書きつづった一冊の美しい、小さな書物『カール・ベーム』の冒頭を飾る一節である。僅かこれだけの文章からさえも、わたしたちはカール・ベームの温かい人柄を知ると共に、教師論への貴重な示唆を読みとるのである。本論においては、これらのことについてもう少し詳細な検討を加えてみるつもりである。

ところで本論に入るに先立って、わたしは指揮者と教育者との関係について少し述べてみたい。わたしが教師論研究の一つの手掛りとして指揮者ベームを選んだのはふとしたきっかけからだが、偶然にも指揮者と教育者との間には少なからぬ類似性がある。ブーバーがある講演の中で、少年合唱団の指揮者の役割を教育者の役割と関連させて述べたのはまことに卓見であったように思う。以下ブーバーの所説を少し敷衍して述べてみたい⁽²⁾。

ブーバーによれば、少年合唱団のあのすばらしい歌声は、単に子供たちの内にひそんでいる可能性が外に向かって解き放たれただけで生れてくるものではないという。確かに、子どもたちの内に眠っているもの、ひそんでいるものは偉大な萌芽に違いない。しかし単に内なる可能性が解放されるだけで、あのすばらしい芸術的世界が創り出されるのではない。その点について、自由主義論者たちは、しばしば誤った理解をしている。大切なのは、自由に解き放たれた子どもたちの可能性が何と出会うかである。もしもそこで適切な世界との出会いがなされないならば、子どもたちのすぐれた潜在力も実を結ばないのである。ここに指揮者の重要な役割がある。

指揮者は、この場合、子どもたちともう一つの世界との間に立っている。すなわち、モーツァルトやシューベルトの世界を背負いつつ、その世界の代理者として、また世界の選択者として子どもたちの前に立つのである。そのためには、指揮者自身がまずモーツァルトやシューベ

ルトの世界と正しく出会っていなければならない。そしてその世界を自らの内に血肉化していなければならない。更に、その血肉化した豊饒な世界の中から、子どもたちにふさわしき世界を精選して、それを自己の人格を通して子どもたちと正しく出会わせなければならない。指揮者にとって必要なこれらの役割は、教育者の役割と何とよく似ていることだろうか。

指揮者はまた助言者でもあれば、暗示者でもある。指揮者は子どもたち一人一人のもっている個性的能力を尊重し、その力を十分に発揮させなければならない。しかしそのことは決して放任と同じではない。指揮者は間違った音を敏感に見抜かなければならない。そして指揮棒や指先の微妙な動きや、言葉以上の目くばせによって、その都度正しい状態へと引き戻さねばならない。この点においても、指揮者の役割と教育者の役割とは非常によく似ている。

その限り、すぐれた指揮者ベームは、そのまますぐれた教育者たるの資格をすでに有しているともいえる。しかし、わたしたちがカール・ベームに学ぶ点は単にそれだけではない。一人の指揮者として以上に、かれは遥かにすぐれた教育者なのである。かれの人格において、資質において、またその生き方において、わたしたちはかれから多くのものを教えられる。以下、本論において、十項目にわたって検討してみたい。

Ⅱ. 本 論 - カール・ベームに学ぶもの

(1) 「仕えるもの」としての謙虚さ

「指揮台に立つ偉大なる召使、スター気どりのないスター指揮者、情熱的な楽人―しかし、すべての肩書ぬきて呼びかけられることこそ、かれには価値あることなのだ。ただのカール・ベームであるということこそ、かれの楽しいぜいたくなのだ⁽³⁾。」

この言葉は、上掲の著書『カール・ベーム』の末尾に出てくる一文だが、カール・ベームの人柄を実によくいいあらわしている。誰が一体スターでないことを望むだろうか。とりわけ現代においては、多くの人々がスターを夢み、スターになりたがっている。そういう風潮の中で、ベームはつつましく自分の位置を保つ。指揮者は一見、確かにスター的存在である。しかし、「スターであってはいけないのだ」と自分にいい聞かせる。楽団あつての指揮者であり、指揮者あつての楽団であるという相互関係を正しくみつめている。だからこそ、かれは自らを楽団に仕える僕として自覚したのである。

そういう人が他にもいる。先日、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団が来日したが、その時の指揮者クルト・マズア氏がそうであった。かれは見事な演奏を終って、割れるような聴衆の拍手に包まれた時、楽団員全員を立たせたまま、自分だけは足早に舞台のすそに姿を消

してしまった。一瞬、聴衆はあっけにとられたが、ほどなくしてその深い意味を了解した。多分、マズア氏にとって、この賞讃を受けるに価するものは自分ではなくて、自分の蔭にかくれて力演してくれた楽団員全員なのだという思いがあったのであろう。その謙虚さが、ごく自然にこのような行動をとらしめたのであろう。美しい心である。

わたしはここで、同じような思いをもってペスタロッチを回想することもできる。死の前年、老ペスタロッチは、ペスタロッチ主義を採用しているボーゲンの学校を訪れたが、そこで子どもたちの絶大なる歓迎を受けた。子どもたちは、かれの主著『リーンハルトとゲルトルート』に出てくるゲーテの詩を歌ったり、自分たちの手で作ったかしわの葉の冠をペスタロッチに捧げようとした。ペスタロッチは嬉しさのあまり深く感動するのであるが、「わたしにはそれを頂く資格はありません。それはもっと無邪気な人々にこそふさわしいものだからです」といって固く辞退したという。ここにもわたしたちは、「スター気どりのないスター」を仰ぎみることができる。

さてひるがえって、「教育とは何か」をもう一度考えてみる必要がある⁽⁴⁾。教育とは、先なる世代の者が、後なる世代の者に文化財を伝達する働きであるともいえるであろう。あるいはまた、大人が、社会的に未成熟な子どもをして、社会が要求する一定のレベルにまで高め、社会に適応できる人間にまで形成することだともいえるであろう。しかし、これらの定義の中には、教師や大人が主役の位置を占め、子どもたちを教えたり、導いたりするのだという自負が認められるようである。こうした教育観に対して、児童中心主義の教育観は、一つの新しい観点を提示した。たとえば、ルソーによって代表されるように、子どもの内なる自然性に従ってゆくことこそが教育にとって大切なことだという点が新たに注目されるようになった。教育とは、この意味において、子どもに仕えてゆくわざでなければならない。

ブーバーは更に新しい観点を加えてくれる。ブーバーによれば、世界が人間を教育するのであって、その中には、自然も社会も人間も包含される。そうした全環境が人間を教育するのであって、教育者だけが教育の主役ではない。このような立場に立って教育者の働きを考えるならば、それは多くの教育力の中のほんの一部分にすぎないということが自覚されてくる。そして究極的には、神と世界との合一の力が人間を育ててゆくのである。従って、教育者は、子どもに仕え、社会に仕え、歴史に仕え、神に仕える者でなければならない。そういう仕える者としての謙遜な態度を、わたしたちはまずベームから教えられる思いがするのである。

(2) 尊敬に基づく権威

「ベームは演奏前のリハーサルで自分が確実にしたものを、夜の演奏のときにも厳密に作り出す。明瞭なサインを与えるかれは、まるで作品の絶対的な法律顧問である⁽⁵⁾。」

「法律顧問」といういい方は、かれの経歴と深く関わっている。かれは普通の指揮者たちのように、音楽への道だけを歩いた人ではない。音楽に関しても早くからその才能をひらめかしたが、「弁護士の息子」であり、かつ「勤勉な息子」であったこのカール・ベームは、ブラームスの友人オイゼビウス・マンディツェフスキーのもとで「和声学と作曲学、対位法を学ぶ⁽⁶⁾」かたわらに法律学をも勉強し、やがて「博士」並びに「教授の称号」をも獲得するのである。そのゆえかどうかは別として、ベームの指揮には時としてこの法律家ベームが顔をのぞく。絶対の権威をもって全楽団を見事な調和へと統率するのである。

この点においても、指揮者ベームは教育者のあり方に貴重な示唆を与える。子ども中心の立場に立つ教育論においては、しばしば教育者の権威はしりぞけられる。しかし教育関係が単なる友人関係でない限り、教育者の権威は正しく保持されなければならない。ただここで注意されなければならないことは、権威と権力とをすりかえてはならないということである。「権力は外からの拘束力であり、権威は内的拘束力である⁽⁷⁾。」ケルシェンシュタイナーはこのような内的拘束力としての権威を「精神的・道徳的な卓越さに対する畏敬、愛、尊敬に基づく権威⁽⁸⁾」という言葉でいいあらわしている。かれは更にいう。「生徒のもつ権威についての意識は、いよいよもって、教育者のもつ愛の意識や、精神的な道徳的な卓越さの意識からして、あらわれ出てくるに違いない。外的な強制による服従にとって代って、愛や畏敬から生じる内的な強制による服従があらわれてくるのである。⁽⁹⁾」と。服従が自由意志に基づいてなされる時、それは決して苦痛ではない。それどころか、人は常にそのような内からの服従を可能にするような相手を求めるのである。とりわけ、成長発達の途上にあり、はっきりとした方向を未だもたない子どもたちにとっては、たえず「明瞭なサイン」を与えてくれる人が是非とも必要なのである。教育者は指揮者と同じく、そのような期待に応えうる者でなければならない。そしてそのためには、教育者自身、自己の内実を充実しなければならない。その理由は、すでに皇至道博士が指摘しておられるように、「児童のもつ自由の本質を、もっとも正当に把握することのできるものは、教師の広く豊かな教養と、深く温かな洞察力であり、児童の個性の人格にまでの発展を助成することのできるものは、人間文化の諸領域に対して統一的な理解をもつところの、人格に外ならないからである。⁽¹⁰⁾」カール・ベームがもっていた権威はまさしくそのような権威、すなわち音楽の極致を究め、加うるに人間的な豊かさと愛に裏打ちされ、かれに接近するすべての人々を魅了し、尊敬の念へと導かずにはおかないような権威であった。このようなかれから、わたしたちは教育者に必要な第二の要素を教えられる。

(3) 共に生きる心

「ベームは何よりもオペラの指揮者である。歌手たちと共に愛し、憎み、歌手たちと共に、

笑い、泣く—生きている音楽づくり、それこそかれにとって心からの願いなのだ⁽¹¹⁾。」

権威の人ベームは、また愛の人ベームでもあった。かれは歓喜の絶頂にある時にも、苦境のどん底にある時にも、周囲の人々へのやさしい思いやりを失わなかった。第二次世界大戦の暗雲が世界をも、ドイツをも絶望的におおっていた時、かれが団員たち一人一人に対していかに心を使っていたかは、次の一文によっても明らかである。「ベームはこの新しい輝かしい契約を、しかし手ばなしに喜ぶわけにはいかなかった。1943年では、まだ音高い拍手のあらしはつづいても、もう戦争のとどろきをうち消すことはできなかった。戦争は、たとえ音楽の殿堂の前であっても、^や熄みはしないのである。ベームは同僚たちを困窮や戦争の影響からいかに守りうるかとひたすらに心をくたくことしかできないのであった⁽¹²⁾」と。このようなやさしさは、戦争という異常な状況下においてだけではなく、世界に平和が甦ったのちにおいても少しも変りはしなかった。ベームがいるところ、そこにはいつも温かい雰囲気^やがただよい、ベームが指揮台に立つ時、団員の心は常に一つに集中し、和合した。だから次のような光景も起るのである。あるオペラの上演が終った時、「演奏者たちはいすから躍りあがってこの指揮者に拍手かっさいし、合唱団（員）も舞台の上から（ベームに）拍手をおくった⁽¹³⁾」というような光景が。これほどの尊敬と共感とを団員一人一人の心に呼び起す力、それはいうまでもなく、ベームその人のもつ愛のやさしさのゆえであろう。

ここで、わたしは、またしてもペスタロッチを思い出すのである。かれの『シュタンツだより』には、次の有名な言葉が記されている。「わたしはかれらと共に泣き、かれらと共に笑った。かれらは世界も忘れ、シュタンツも忘れて、わたしと共におり、わたしはかれらと共にあった。かれらの食べ物はわたしの食物であり、かれらの飲み物はわたしの飲み物であった。わたしは何ものももたなかった。わたしはわたしの周囲に家庭ももたず、友もなく、召使もなく、ただかれらだけをもっていた。かれらが達者な時も、わたしはかれらの中にいたが、かれらが病気の時もわたしはかれらのそばにいた。わたしはかれらの真中に入ってねた。夜はわたしが一番後で床につき、朝は一番早く起きた。わたしはかれらの寝つくまで床の中でかれらと共に祈ったり、教えたりしたが、かれらはそうしてもらいたかった。終始一貫病気感染のひどい危険にさらされながら、わたしはかれらの着物や身体のひとつどうすることもできない不潔をみてやった⁽¹⁴⁾」と。

このペスタロッチとベームに共通する点は、他人の心を心とし、他者と共に泣き、共に笑うことのできる愛の心であった。

教育とは、教育する者と教育される者との間に行われる作用であるが、この愛の関係を基礎とすることなしにはとうてい成り立たないであろう。ベームは、この点においても、わたしたちのよき師であるといえる。

(4) 地震計のような敏感さ

「何時間もいっしょにいと、相手の質問や考えさえも、ひとつひとつまるで地震計のように記録する、なみはずれてやさしい思いやりのある人であることがわかってくる⁽¹⁵⁾。」

教育作用にとって、愛が不可欠の前提であることはすでに述べた通りであるが、愛が教育的に効果を発揮するためには、ただ愛するというだけでは十分でない。その愛は具体的な個々人に向けられ、一人一人の子どもの個性に基づき、そのつどの状況に即して働かなければならない。

ベームは、「相手の考えや質問さえも、ひとつひとつまるで地震計のように記録する」敏感さを身につけていたようであるが、教育者にもこのような敏感さが必要なのである。ケルシェンシュタイナーもいっているように、子どもたちの一寸とした表情の変化や言葉のはしばしから、子どもが今何を求め、何に興味を示しているか、また何に悩み、どういう問題に直面しているかをそのつど正確に読みとって、教育的に処理してゆく時に、教育者の愛は現実的に生きてくるのである。

しかも、その敏感さが「やさしい思いやり」と結合して働く時に、教育者ははじめて生徒一人一人を正しく理解することができるであろう。ベームはこの点においても、わたしたちに貴重な示唆を投げかけてくれる。

(5) 若々しさと思慮深さ

「若い人たちは澆刺とした情熱にみちているこの指揮者の弾力、バネのようにみなぎる力に驚嘆する。新鮮さと疲れをしらない『さあいつでもこい』の構えが、伝染性の作用をするのだ。ベームはどんな作品をとりあげても、そのたびに、かれ自身はまるではじめて聞いているかのような印象を与える。……かれはわたしたちのヨーロッパの指揮者の中では最も若々しい人だと、歌手たちも演奏家も口をそろえていっている⁽¹⁶⁾。」

カール・ベームは情熱の人であり、いつまでも若々しさを失わない指揮者であった。この若さは芸術家にとってのいのちであるが、若い生命を相手とする教育者にとってもそれは欠くことのできない大切な要素といえる。ペスタロッチの偉大さを支えたものにはいろいろな要素が考えられるが、かれが自らを「白髪の童児」と称したように、いつまでも衰えない若さと無邪気さがその大きな要因であったことは間違いない。ルソーもまた『エミール』の中で「教育者は若ければ若いほどよい⁽¹⁷⁾」といっている。年をとるということは、それだけ子どもとの間

に距離を作ることになり、また老化するということはそれだけ新鮮さを失うことになるからである。わたしたちは好むと好まざるとにかかわらず年令を加えてゆく。しかしそのような年令の増加にもかかわらず、若さと情熱と新鮮さをもちつづけてゆくように心掛けたいものである。

ところで、情熱家ベームには、常にもう一つの面が補い合っていた。それは「法律家ベーム」のもつ冷静さである。かれはある日の日記にこう記している。「わたしはうねる高波、どよめく全体の中で、みんながおし流されたり、おぼれたりしないように、ひたすら気をつけていなければならなかった⁽¹⁸⁾」と。この冷静さの裏付けがあつてこそ、情熱家ベームの指揮は益々さえてくるのである。情熱と冷静さ、若々しさと円熟さ—これら二極のものが渾然と一体になっているところに、あのすばらしいベームの音楽が生れるのである。ここでもう一カ所、レーマーの文章を引用してみることにしよう。「モーツァルトであろうと、R・シュトラウスであろうと、歌手はかわっても、指揮台にはいつもプロフェッサー、ドクター・カール・ベームが立っていて、かれの顔は以前より血色が衰え、肩が幾分前かがみになっているが、その指揮棒は以前のはずみふるえる力をいささかも失つてはいなかった。まるで20才の青年のように、軽快であり、熱情にあふれているが、しかしまた60才の経験と芸術家の責任をそなえた人—ウィーンの音楽会はそういうかれを味わうのである⁽¹⁹⁾」と。

先に引用した『エミール』の中で、ルソーもまた若さと聡明さとを一对のものとして述べている。なるほど、教師は若ければ若いほどよい。しかし「聡明な人である限りにおいて」という条件をつけている。子どもにとって本当に望ましい教師というものは、若さと情熱とを内に秘めつつ、しかも冷静な判断と深い熟慮をもった大人であろう。そういう理想的な教育者の一つの典型を、わたしたちはベームにおいて見ることはできるのではなからうか。

(6) ユーモアと寛大さ

「かれのレパートリーには、ボビイ伯爵が見せてくれるようなウィットがあふれている。かれの魅力は人の心にしみとおる魅力である。かれのユーモアは正真正銘のシュタイアー人のものである。かれの心はきわめて感じやすいが、しかしまた寛大でうちとけやすい⁽²⁰⁾。」

ここにもまたベームの人柄がよくにじみ出ている。ユーモアとは、生活の中における潤滑油のようなものである。人間と人間が関わり合う現実生活においては、しばしば緊張関係やあつれきが生じる。そのような時に、ぎこちない雰囲気やを和らげ、明るい笑いを送りこむのがこのユーモアである。

従つてこれは、教育関係にとつても欠くことのできない大切なものである。なぜなら、教育

者と被教育者とが向かい合う教育関係というものは、しばしば真面目すぎるほどの緊張関係に傾き易いからである。そういう雰囲気の中に、子どもらしい快活さと明るさを取り戻すためには、是非とも教育者のユーモアを必要とするのである。

ユーモアはまた寛大さにも通じている。いと小さきものや不完全なものに対しても、また未完成なものや表面上無価値に見えるものに対しても、同情や理解の心を失わない、そういう大きなまなざしをもった心からのみ、ユーモアは湧き出てくるからである。

またボルノウは、「高みから眺める余裕」という意味において、教育者に特有なユーモアを語っている。「教育的見地からすれば、ユーモアとは、子どもの小さな悩みごとを、ある一定の高みから余裕をもって眺め、それを軽く受けながす能力である。というのは、教育者がもしも、当の子どもにとっては無限の、もはやとても耐えきれないと思われるような悩みを、いちいち子どもと同じように重大に受けとめるならば、もはやかれは正しい仕方では子どもを助けてやれないだろうからである。もしも子どもと同じように、その悩みのとりこになるのならば、教育者は、子どもと共に同一の状況におかれることになる。それと反対に、教育者はユーモアによって、緊張をほぐすのである。かれは、子どもと同じような仕方では厄介なことに真剣に取り組むことをせずに、それを軽くあしらい、こうして子どもにも、内的にそれを乗り越える可能性を得させる⁽²¹⁾」のであると。

このように、ユーモアという言葉には、いろいろな意味が含まれているが、そのいずれにおいても教育者にとってなくてはならないものということができるであろう。ユーモアの人ベームは、ここでもまた、わたしたちの手本となる。

(7) 素朴さと率直さ

「ただのカール・ベームであるということこそ、かれの楽しいぜいたくなのだ⁽²²⁾。」

「人は模範であるまいと思う時にのみ模範でありうる⁽²³⁾」とは、シュプランガーの言葉であるが、「ただの」人であろうと努めたベームにおいて、わたしたちはかえってすぐれた模範を見出す。

教育者は、しばしば世間の人々から過度の期待を受け、特殊な目でみつめられがちである。そのために、わざとらしいしなをつくり、遂には悪しき意味の教師タイプに陥りやすい。そしてその結果、子どもたちとの間に高い垣根をめぐらすことになるのである。

子どもたちは、そのような教師を求めているわけではない。あけっぴろげで、子どもたちがいつでもその胸の中に飛びこむことができるような先生、気安く話すことができ、子どもっぽい悩みごとをも真剣に聞いてくれるような教師をこそ待っているのである。ピュリアスは、かれの書物

の中で、「歴史上の偉大な教師に共通してある特質は、子どものような率直さと、生命への近親感である⁽²⁴⁾」と述べているが、まさしくその通りだとわたしも思う。

ベームの口ぐせは、「わたしは根っからの山男だ⁽²⁵⁾」という言葉であったそうだが、そういう気どらない人柄が、「人の心にしみとおる魅力⁽²⁶⁾」となって、多くの人々の心を取りこにしたのであろう。かかる素朴さ・率直さを、わたしたちはベームから学びとりたい。

(8) 信頼と自由

「非常に動きの少ない上げた左手は、歌手に自由を与える。かれの愛情は偉大なカンティレーナ（歌うような抒情的旋律）のようなものだ。歌手たちはそれを知っていて、ベームが指揮台に立つとうれしくなる⁽²⁷⁾。」

何とほほえましい光景であろう。歌手たちや演奏者たちにとって、指揮者という存在は、しばしば、あたかも小学生の前に立つ教師のように、こわい存在に見えるものである。それなのに、かれらは「ベームが指揮台に立つとうれしくなる」という。これは一体どうしたことなのだろうか。両者の関係がいかにうまくいっているかを如実に物語っている。

ベームは、かれの尊敬するリヒャルト・シュトラウスから、できるだけ動きの少ない指揮法を学びとろうと努めたといわれているが、このことは、わたしたち教育者にとっても貴重な教訓となる。指揮者にとっても、教育者にとっても、導く手は干渉がましくあってはいけない。むしろ相手にできるだけ自由を与え、相手の内に眠っている可能性を十分に引き出してやることから始めなければならない。しかるのちに、「明瞭なサイン」を送ることによって正しい方向づけを行うのである。

けれども、教育者は往々にしてこのことを忘れがちとなる。大人の目からみる時、子どもはまことにおぼつかなく、頼りないものにみえる。そのために、教育者はしばしば、手とり、足とりして子どもたちを導こうとする。そこで子どもたちは、萎縮したり、反抗したり、盲従したりして、遂に自主的判断力を正しく育てる機会を失ってしまうのである。

ボルノウは『教育的雰囲気』（邦訳書名は『教育を支えるもの』）の中で、「人間は周囲から自分がそう思われていると考える度合に応じて自らを形成する⁽²⁸⁾」と述べているが、この言葉は深く考えさせられる言葉である。大人にせよ、子どもにせよ、人は信頼と期待の中で、その信頼に応えるように行為をし、また成長するのである。従って、ベームの指揮下にある団員たちの演奏や合唱のすばらしさも、結局は、ベームの団員一人一人に寄せる信頼と、かれが与える思い切った自由さの中で創り出されるものだといえることができる。

教育が真に成功するか否かの鍵も実はここにある。教育者は、何よりも生徒を信頼しなけれ

ばならない。子どもの中にまどろんでいる可能性を信じ、また子どもらしい考えを温かく受けいれてやらなければならない。そればかりか、時には、大人の目からみて危なっかしく思えるような冒険にみちた事柄に対してさえも、信頼してやる心をもつ必要がある。それは一種の賭のようなものである。賭である限り、その期待と信頼は裏切られることもある。しかしボルノウのいうように、どんなに裏切られてもなお、その信頼を保持しつづける忍耐こそが、結果的には子どもを育てるのである。

ニールは、「愛が愛を生み、憎しみが憎しみを生む」といったが、同じようない方をすれば、信頼が信頼を生み、不信が不信を生むのである。教育者の子どもに寄せる信頼が、子どもの中に教育者に対する信頼を深め、その信頼感が子どもの心に深く根づく時、それは一層広く、人間並びに世界に対する信頼の心を確固たるものとして、子どもの心の中に宿らせることになるのである。

信頼の人ベームから、わたしたちは教育関係における信頼関係の重要性をも改めて教えらる。

(9) たゆみなき自己陶冶

「かれはまた、今後とも自分自身をきたえ相変らず勉強するつもりだと、どんな機会にも強調することを忘れない⁽²⁹⁾。」

指揮者の役割が、もしも序論で述べたように、自らの人格を通して、モーツァルトやシューベルトの世界と演奏者や合唱者を出会わせることだとしたら、指揮者の果たしうる限界は、その人の昇りつめた高さ、自らに血肉化しえたレパートリーの広さによってきまらるであろう。それゆえに、すぐれた指揮者でありうるためには、音楽的世界をより深く究め、また巨匠たちの世界をより豊かに自己の中に消化しなければならない。

ベームは、レーマーの証言を待つまでもなく「世界的な指揮者たちの最前列に立っている⁽³⁰⁾。」このことは、かれの生れながらに賦与されている天分と大いに関係があるが、それと同時に、もう一つの側面をも見落してはならない。それは、かれのたえざる自己訓練ということである。

およそ、天才といわれるような人々は、ほとんど例外なく、意志の天才でもあれば、努力の天才でもあった。その典型がゲーテである。かれがある時、エッケルマンに語った次の言葉は、よくそのことを裏書きしている。「いつかはゴールに達するというような歩き方では駄目だ。一步一步がゴールであり、一步が一步としての価値をもたなくてはならない⁽³¹⁾」と。ベームもまたそのような歩き方をした。「一步一步足をふみしめながら⁽³²⁾」かれは今日の地位

を確保したのである。

このような態度は、教育者にとってもきわめて必要な態度である。「何人といえども、あらかじめすぐれた熱烈な自己形成者であらぬ限りは、決して人間形成者にはなりえない⁽³³⁾」とはシュプラランガーの言葉であるが、教えるためにはまず自らが価値の所有者でなければならない。しかも大切なことは、かれが今どれほどの価値を所有しているかということよりも、価値に向かってどれほど真剣に、かつどれほど熱心に希求しているかということである。真・善・美という価値を求めて、たえず努力しつづけてゆく姿こそが、子どもたちの心をうち、子どもたちの心の内にも真理探求への熱情の火を燃えたたせるのである。努力の人ベーム、たえざる自己訓練の人ベームから、わたしたちは、今一つ教育者にとっての大切な態度を教えられる思いがする。

(10) 指揮者以上のもの

「聴衆はといえば、この壇上には指揮者以上のものが立っている、それは全身これ生粋^{きんすい}の楽人である、ということをつまじ感じとってしまう。コンサートの指揮者としてのベームには、このことがもっと強烈にあらわれる。かれは聴衆をまるで陶醉状態にしてしまう⁽³⁴⁾。」

「専門馬鹿」という言葉がある。自らの狭い専門領域に閉じこもって、人間としての広い視野をもたないコチコチの人間を諷刺している言葉である。もちろん、専門職への徹底ということは、いかなる職業においても大事なことであろう。「一つのことを正しく知り、かつ実行することは、百のことを中途はんばにやることよりも、もっと高い教養を与えてくれる⁽³⁵⁾」とゲーテが忠告してくれたように、一つの専門分野に心を傾けて生きる姿は美しいし、また実りも大きい。その意味において、指揮者はあくまでも指揮者らしくなければならぬし、教育者はどこまでも教育者らしくその内実を充実することに専念しなければならない。

しかし、聴衆に真の感動を与えるのは果して指揮者の巧みな棒さばき（指揮法）であろうか。否、それを超えるものである。「全身これ生粋の楽人」といわれるような、不思議な人格的雰囲気である。かれ自身音楽の中にひたり、またかれの中からすばらしい音楽の泉が湧きでてくる、そういう音楽と人格とが一体となって放射する、説明不可能な力が聴衆の心を魅了するのである。ベームはそういう人格的放射能を身に備えた人である。「指揮者以上のもの」とは、おそらくそういう意味であろう。

教育者についても、ほぼ同じようなことがいえるのではないだろうか。教育という仕事に従事する者は、教育の基礎理論に通じていなければならないし、心理学などの教職教養も身につけておかなければならないし、教えるに必要な教材研究もできるだけ多くやっておかなければ

ならない。そのみか、教育の実践に欠くことのできない教育技術にも習熟しておく必要がある。だがそれだけでよき教育者といえるかといえば、必ずしもそうではない。子どもの心を開かせ、喜んで自己成長へと押し出してゆく力、生徒の内面をゆさぶり動かし、自己変革へと促がす力、人間の最も奥深いところにある中核を呼びさまし、真の自己へと覚醒させる力―これらは教育理論や教育技術以上のものである。すなわち、教育者の全人格的な感化力である。放射能的なあるものである。教育者にとってのもっとも大切なこの面についても、わたしたちはベームから無言の教えを受けるのである。

Ⅲ．結 び

以上、わたしはカール・ベームから多くのことを学びとることができた。ここでもう一度その全体をふりかえり、総合的に整理することによって、結びの考察としたい。

思うに教育者とは、実に多くのことを要求される職業である。仕事の対象が生きた人間であり、しかも成長の途上にあり、他からの影響を受け易い未成熟者であるということがその主な理由であろうが、多数の子どもたちが一人一人随分異った個性をもっているということも深い関係を有しているであろう。

発達の途上にある子どもたち―その限り、教育者は、温かく見守り、^{はぐ}育くみ、また子どもの内からの自然な発達の度合に即して適当な陶冶価値を与え、あるいはまた無軌道な自由さから子どもたちを救って、正しい方向づけをしてやらなければならない。ここに当然のこととして、教育者には一方に、やさしい愛と思いやりの心が、他方に、文化的諸価値の提供者並びに正しい方向を指し示す暗示者としての権威が要求される。愛が盲愛であったり、偏愛であったりしてはならないと同様に、権威が権力とすりかえられてはならないことはいうまでもない。これらの点について、ベームは愛と権威の正しいあり方をまずわたしたちに教えてくれた。

次に、教育愛についてであるが、これは単なる価値愛（エロス）でもなければ、単なる隣人愛（アガペー）でもない。それらを共に内に含んだ一種独特な構造をもった愛である⁽³⁶⁾。教育愛とはすべての子どもたちに公平にかかわらねばならない愛であるが、それと同時に一人一人に異った・独自の仕方で、しかも教育的に効果あるような仕方でかかわらねばならない愛である。そのためには、教育者は何よりも一人一人の子どもたちを、その個々の特性に即して正しく理解し、またその時々状況に即して臨機応変に対処しなければならない。ここにおいて、教育者には教育的敏感性とともいうべき能力が要求されるが、この点についても、ベームは「地震計のような敏感さと「なみはずれてやさしい思いやり」という・かれ自身のもつ特性によって、わたしたちに貴重な示唆を与えてくれた。

教育愛はまた価値の世界とも深くかかわっている。教育者が子どもに教えうる限界は、教育

者自身がのぼりつめた高さによって制約されるからである。しかも大切なことは、すでに本論でも述べたように、かれがどの高さを究めたかよりも、むしろどれほど熱烈に価値の世界を追い求めているかにある。ここでも、また、たゆみなき自己精進者としてのベームは、わたしたちにとってのよき手本となった。

子どもの心を魅きつけ、開かせ、ふるいたたせる力は、若さと情熱である。あるいは子どものような率直さであり、気どらない人柄である。こうした点についても、ベームは沢山のことを教えてくれた。そればかりでなく、それらを補うもう一つの面としての冷静さや円熟さ、思慮深さやユーモア、ゆとりや寛大さについても、かれはわたしたちに貴重な学びをさせてくれた。

また教育関係が信頼関係の上に立たねばならないことはいうまでもない。人間が真の意味で人間になるとは、人が他者に対し、また世界に対して「われとなんじ」の関係に立って生きることにほかならないことはブーバーのいう通りである。とすれば、そのような人格形成を育くむ土壌は、何ととっても、人間と人間との間の信頼関係であろう。家庭における・幼き日の親子関係がどんなに決定的な意味をもつかはいうまでもないが、教育者と子どもたちとの関係においてもこのことはゆるがせにできない。教師の子どもに寄せる信頼感が、子どもの中に、その期待に添うような成長を促すのみならず、子どもの心の中にも知らず知らずのうちに、人間と世界に対する（究極的には神に対する）信頼の心を目ざめさせるからである。この点に関しても、ベームは信頼の人の典型であった。

人間を動かす力、人間を変える力は、人間のもつ知識や教育技術以上のものである。それは長年の間におのづからにつちかわれた人格的な感化力である。それは人間全体、その人の生き方の総体にかかわっている。ベームはその点においても、真に人を動かす力を備えた数少ない人の一人であった。しかもベームのベームたるゆえんは、そういう自らを少しも誇らないところにあった。「ただの人」ベームであることに誇りを感じ、自らを楽団に仕える「召使」として自覚した。この謙虚さが、わたしたちを変えさせるのである。この心はやがてブーバーの示唆するところのものにまで通じてゆく。ブーバーは、世界が、神が、人間を変えるのだという。従って、人間のなしうるわざは、そういう大きな力のほんの一部にすぎない。あるいはその根源力の手足にすぎない。わたしたち教育の任にたずさわる者は、このことを謙遜に認めなければならない。このような教育者の限界の問題にまで目を向けさせてくれるところに、ベームの比類まれなる謙虚さがある。

ともあれ、偶然手にした一冊の小著がかくも多くの貴重な示唆を教師論の上に与えてくれようとは思ってもよらなかった。このことを通して知りえたことは、真の教育者、生きた教育者の手本は、いたるところに存在するということである。教育史というわくを越えて、文化史のあ

らゆる隅々に、あるいはわたしたちの周辺にも多くのすぐれた教育者がいるということである⁽³⁷⁾。そうした人々を発掘することを通して、今後もいろいろな人々から、教師論への貴重な示唆を聞きとってゆきたいと思う。これはそのためのほんの一試論にすぎない。

(注)

- (1) マルガレーテ・レーマー (田代崇人訳) 『カール・ベーム』 (昭46、朝日出版社) 3～4頁。
- (2) 拙稿「ブーバーの教師論」(『北陸学院短期大学紀要』第3号、1971、所収) 参照。
- (3) M. レーマー前掲書57頁。
- (4) 拙稿「人間存在の重層性と教育の多義性」—教育の定義をめぐる人間論的考察—(『北陸学院短期大学紀要』第1号、1965、所収) 参照。
- (5) M. レーマー前掲書39頁。
- (6) 同上6頁。
- (7) 石井次郎「教師の権威」(『高校と教育』福岡県教師会高等学校部会発行、第19号、昭46、所収)
- (8) ケルシェンシュタイナー (玉井成光訳) 『教育者の心』 (昭32、協同出版) 74頁。
- (9) 同上76頁。
- (10) 皇至道『現代教師の性格』 (昭29、光風出版) 47頁。
- (11) M. レーマー前掲書56頁。
- (12) 同上20～21頁。
- (13) 同上9頁。
- (14) ペスタロッチ (長田新訳) 『隠者の夕暮・シュタンツだより』 (昭46、岩波文庫) 56～57頁。
- (15) M. レーマー前掲書3～4頁。
- (16) 同上56～57頁。
- (17) ルソー (今野一雄訳) 『エミール』上 (昭39、岩波文庫) 50頁。
- (18) M. レーマー前掲書15頁。
- (19) 同上30頁。
- (20) 同上3頁。
- (21) ボルノウ (森昭・岡田渥美訳) 『教育を支えるもの』 (昭44、黎明書房) 160頁。ユーモアについては、ボルノウのほかにも、ケルシェンシュタイナーやノールの書物の中に示唆多い記述があるが、日本のものでは、杉谷雅文著『現代日本教育の根本問題』 (昭30、光風出版) 第3章の内容がすぐれている。
- (22) M. レーマー前掲書57頁。
- (23) シュプラランガー (浜田正秀訳) 『教育者の道』 (昭34、玉川大学出版部) 65頁。
- (24) E、V、ピュリアス (都留春夫訳) 『教師』 (昭45、文教書院) 28頁。
- (25) M. レーマー前掲書31頁。
- (26) 同上3頁。
- (27) 同上38頁。
- (28) ボルノウ前掲書113頁。
- (29) M. レーマー前掲書48頁。
- (30) 同上3頁。
- (31) ゲーテ (手塚富雄訳) 『エッケルマン・ゲーテとの対話』 (手塚富雄著『いきいきと生きよーゲーテに学ぶ』 昭43、講談社現代新書、所収) 12頁。
- (32) M. レーマー前掲書3頁。

- (33) シュプランガー前掲書25頁。
- (34) M、レーマー前掲書39頁。
- (35) ゲーテ（関泰祐訳）『ウィルヘルム・マイステル、遍歴時代』（関泰祐訳編『人生について—ゲーテの言葉—』昭37、社会思想社、現代教養文庫、所収）195頁。
- (36) 「教育愛」については、別の機会に書いたので、次の拙稿を参照願えれば幸いである。
岡田正章編『教育学』（酒井書店）第6章教育愛。
なお、次の三著は、日本におけるすぐれた教育愛に関する著作として特に推奨したい。
新堀通也『教育愛の問題』（福村書店）。（初版は昭和29年に学術刊行会より『教育における愛の問題』という書名にて出版された）
稲富栄次郎『教育の本質』（昭29、福村書店）第2章教育愛。（初版は『教育作用の本質』と題して昭和10年目黒書店より出版された）
前田 博『教育本質論』（昭33、朝倉書店）第5章教育の動機—教育的愛と教育への情熱—。
- (37) 『ほんとうの教育者とは問われて』（昭47、朝日出版社）という書物が先頃出版されたが、ここには多くの人々の師との出会いがまことに興味深く記されている。